

国を護るとは「飛鳥Ⅱ」の寄港地より

「飛鳥Ⅱ」アラスカ・ハワイグランドクルーズに46日間乗船し、アラスカやカナダ、アメリカ西海岸、ハワイなど計11箇所の寄港地を訪れました。現地を訪れ、歴史に触れたことで「くにまもり」とは何かを考える時間となりました。今回は、寄港地で感じた「くにまもり」をお伝えします。



この46日間で自分を成長させようと、出航前に本を約40冊集めました。船

内で時間を見つけては読書をし、辞書のような分厚い本も含め、ほとんどを完読しました。乗船前は11箇所の寄港地も下船せず、本を読むつもりでいました。ところが、最初の寄港地アラスカ・コディアックへ上陸した瞬間に考えが変わりました。現地を歩くことで、多くの学びがあると気づいたのです。それからは、寄港するたびに下船してその地を歩き、できる限り歴史資料館へ足を運びました。現地を訪れる中で、私が何度も考えたのは「国を護るとはどういうことなのか」ということでした。

アメリカの49番目の州であるアラスカは、現在の価値で約220億350億円という価格で、1867年にロシアから購入したと言われています。アメリカ全土の17%の土地を誇るアラスカを破格の値段で購入したのです。当時は「巨大な冷蔵庫を買った」と笑われましたが、その後のゴールドラッシュや豊富な地下資源の発見によって莫大な富を生み、アメリカにとって極めて

重要な州となりました。アラスカには、古くから先住民族が暮らしていました。しかし、18世紀にロシアが足を踏み入れ、80年間の植民地を経て、アメリカに売却されました。国同士の取引で土地の所有者が変わるという歴史は、支配する側から見れば発展ですが、そこに暮らしていた人々からすれば、自分たちの文化や暮らしを奪われるということでした。

ハワイも同じです。現在はアメリカ50番目の州ですが、かつては独立した王国でした。豊かな文化や伝統を持ちながらも、歴史の大きな流れの中で姿を変えてきました。歴史資料館を巡るたびに感じたのは、自由も文化も、決して当たり前ではないということ。力がなければ、簡単に奪われてしまうことを学びました。

サンフランシスコでは、1951年9月8日にサンフランシスコ講和条約が締結された、戦争記念オペラハウスを訪れました。この地で条約が結ばれ、翌年の1952年4月28日に日本は主権を回復し

ました。静かな建物の前に立つと、悔しさと嬉しさが入り混じるような感情になりました。ハワイでは真珠湾を訪れました。空を見上げたときに、戦わざるを得なかった多くの先人たちの想いが頭を駆け巡りました。さらに心を動かされたのは、日系二世で編成された第442連隊の墓地です。敵国の血を引くという理由から厳しい扱いを受けながらも、彼らは志願して戦場へ向かい、アメリカ軍史上最も多くの勲章を受けた部隊として数々の功績を残しました。その多くがハワイ出身の日系人です。墓地には名前が刻まれ、彼らの功績は今もなお大切に顕彰されていました。

現地に赴き、歴史を学んだことで、今ある平和も自由も、先人たちが護り抜いてくれた結果であると実感しました。くにまもりとは、決して武力だけを意味するものではありません。歴史や文化、伝統を正しく知り、次の世代へ受け継いでいくことも、私たち一人ひとりにできる「くにまもり」なのです。11の寄港地を通してその大切さを改めて学ぶことができました。

(株)キャリアコンサルティング 代表取締役社長 室舘 勲
MURODATE Isao

2003年に株式会社キャリアコンサルティングを設立。全国で若者の育成に取り組む。千葉県教頭会第1ブロック研究大会、むつろータリークラブ創立65周年式典など講演実績多数。全国社内木鶏経営者会 副会長。ミス・ワールド・ジャパンの講師・審査員。著書に「夢を見て 夢を叶えて 夢になる」(致知出版社)、「まずは上司を勝たせなさい」(講談社)、「『応援される人』になりなさい」(ワック)、「入社1年目から仕事が面白くなる本」(致知出版社)がある。



ブログ



Instagram